

南米にルーツを持つニューカマー第2世代の青年期

The Adolescence of the Second Generation of New Comers
from South American Countries in Japan

角替 弘規

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2015年3月20日 受理)

1. はじめに

本研究は、1980年代後半から急速に増大したニューカマーと呼ばれる外国にルーツを持つ人々について、その学校経験と義務教育終了後の就業状態や生活上の意識をインタビュー調査によって明らかにしようとするものである。

これまでのニューカマー研究における研究関心は、主として労働現場と学校教育という二つのフィールドにおける適応過程とそこにみられる問題に当てられてきた。例えば梶田ら(2005)や丹野(2007)では、1980年代以降労働者として来日した日系人を取り巻く日本の労働環境や雇用の在り方について詳細な調査を行い、新自由主義的経済改革に邁進する日本社会の構造的な歪みが「デカセギ」労働者の雇用の在り方とその生き方に大きな影響を及ぼしていることを描き出し、ニューカマー労働者の問題は単なるマイノリティの問題ではなく、かれらを雇用するホスト社会、すなわち日本社会全体の問題であると指摘した。一方、児島(2006)は「デカセギ」労働者とともに来日したり、かれらに呼び寄せら

れた子どもたちの学校適応に関心を寄せ、日系ブラジル人生徒たちが日本の学校文化のなかでいかなる戦術を駆使し日本の学校に強く見られる同化圧力に対抗しようとしているのかを描き出した。その他にもニューカマーの子どもたちの学校適応をテーマとした研究が数多く行われてきている(太田2000、志水・清水2001、清水2006など)。前者のように「デカセギ」労働者を対象とした研究においては、かれらの日本社会における適応については関心が払われるものの、その子どもたちに関しては射程の範囲内におかれることは少なく、また子どもたちの学校適応を扱う研究にあっては、学齢期の子どもたちについての分析と考察は行われつつも、学校教育を終えた子どもたちがその後いかなる社会生活を送ることになるかについては必ずしも十分に検討されてこなかった。というよりもむしろ、ニューカマーの来日が増加し始めた1980年代から20～30年を経た今日になって、かれらが日本社会で職業生活を送るようになってきたことによって、ようやく分析・考察の対象として立ち上がってきたともいえる。その意味において、本研究は日本社会における

表 インタビュー対象者のプロフィール (1)

	世代	生まれ	国籍	第一言語	母国語	最終学歴	外国人性 表出	親世代との 経済比較	小中 経験
S1	1.5	アルゼンチン (15 歳来日、中1編入)	日本(帰化)	スペイン語	◎	高校(定時)	×	上昇	中：×
S2	1.5	アルゼンチン (14 歳来日、中1編入)	日本(帰化)	日本語	◎	高校(定時)	×	上昇	中：◎
S3	2	ペルー (6歳来日)	ペルー	日本語	○	高校(中退)	○	上昇	小：×、 中：×
S4	1.5	日本 (13歳来日)	ペルー	スペイン語	○	中学	◎	下降	中：○ →×(転 校後)
S5	2	ペルー (4歳来日)	ペルー	日本語	◎	大学	◎	下降	小：△、 中：△
S6	1.5	ペルー (10歳来日)	ペルー	スペイン語	◎	大学	○	上昇	小：×、 中：×
S7	2	ペルー (5歳来日)	ペルー	日本語	◎	高校	◎	下降	小：◎、 中：△
S8	2	ペルー (4歳来日)	ペルー	日本語	◎	大学	◎	上昇	小：○、 中：○

「第2世代」を対象とするという点において意義を持つものである。

日本社会における第2世代を対象とした研究は、在日朝鮮人を対象に蓄積されてきたものがある。例えば福岡 (1993) や金 (1999) では在日朝鮮人のアイデンティティのあり方に主たる関心が寄せられており、かれらがいかなる資源をどのように獲得してきたのかについては触れられていない。

一方、海外では移民二世を対象とした研究が盛んに行われている。例えば Zhou ら (1998) ではベトナム人移民の子どもたちのアメリカでの適応過程が描き出されており、そのプロセスにおけるエスニックコミュニティの重要性が指摘されていた。また Portes ら (2001) では移民第2世代のアメリカ社会における社会的達成を量的調査を踏まえたエスニシティ間比較を行うことで解明している。

これらの先行研究を踏まえつつ、本研究は日本におけるニューカマー第2世代が日本社会においていかなる適応にあるのかを、様々なエスニック・グループ間の比較を行いつつ解明しようとするものである。本稿は南米(スペイン語圏)にルーツを持つニューカマーを対象として、彼らの義務教育経験、経済

状況、転職傾向、親世代との関係、同国人コミュニティとの関係といった点に注目しつつその特徴を明らかにしようとするものである。

2. 本研究の調査対象者

まず調査対象者の概要から示しておこう。本稿で取扱う調査対象である8名のうち2名はアルゼンチン、6名はペルー出身でありスペイン語圏にルーツを持つ(表参照)。いずれも彼らの祖父または曾祖父の世代が南米に移民として移動した後、親世代が日本での出稼ぎを目的として1980年代末から1990年代初頭にかけて来日している。出身国における政治的混乱を起因とする難民としての移動ではなく、経済的な必要性から移動した「経済移民」である。

本人たちは親世代の呼び寄せによって来日を果たしており、ほとんどが出身国で誕生している。日本で生まれたケースは1件のみであったが、この場合も出生後まもなくペルーに移動し、10代になってから再来日している(S4)。

彼ら全員が神奈川県内で義務教育段階を経験しており、筆者は直接／間接にかれらの学

表 インタビュー対象者のプロフィール (2)

	小中成績	学校の友人	転職傾向	親以外のルーツを支える資源	親との交流	結婚 (パートナー)
S1	中：下	少	あり (5 回以上)	×	◎ (別居)	日本人
S2	中：中の下	多	あり (3 回)	中学時代の友人とその家族	◎ (別居)	アルゼンチン人
S3	小：下、 中：中の下	小：いない、 中：いない	あり (4 回)	現在の職場、支援団代	○ (別居)	日本人
S4	中：上→下 (転校後)	多→いない (転校後)	あり (4 回以上)	職場、支援団代、 当事者団体	○ (別居)	未定 (フィリピン人?)
S5	小：下、 中：上	小：多、 中：多	なし	中学時代の友人、 支援団体	◎ (同居)	未定 (日本人)
S6	小：下、 中：下	小：いない、 中：少	あり (4 回)	サッカー、高校・ 大学時代の友人	◎ (別居)	未定 (日本人)
S7	小：中の上、 中：中の下	小：多、 中：多	あり (6 回)	サッカー、音楽、 小中高時代の友人	◎ (同居)	未定 (日本人妻 離婚)
S8	小：中、 中：中の下	小：多、 中：多	あり (4 回)	小中時代の友人、 職場	◎ (同居)	日本人 (予定)

年齢のことを知り得る関係にある。また、本稿ではジェンダー・バイアスを排除するため本稿では男性のみを調査対象者とした。

インタビューでは、これまでの移動経緯、言語、国籍の状況、家族構成、親世代の家族、信仰、母国との関係、在日同国人コミュニティ、学歴、仕事歴、学校での経験、親世代との違い、将来に対する展望、価値観等について半構造的なインタビューを行った。1 回のインタビューは 2 時間程度の時間を要した。

現在、調査対象者全員が経済的に自立しており、生活に困窮するほどの「貧困」状態にある者は見当たらなかった。また、親世代と別居している者の方が多かったが、同居している場合であっても親の援助を受けているケースは見受けられなかった。ただし、それぞれの仕事の状況や将来に対する見通しは様々であり、現在正社員かそれに近い身分を得て比較的安定した待遇にある者は、会社組織内での地位上昇を目標としたり (S8)、現在与えられている職務をいかに遂行するかといった点についての悩みを表明していた (S5)。その一方で比較的不安定な待遇にあると思われる場合 (S4) や、独立して商売を営んでいるケースにあっては、仕事そのものや自ら

の将来の方向性についての悩み表明していた (S1)。

こうした状況にある南米にルーツを持つ彼らを分析する際に注目したいのは、来日年齢と第一言語である。Portes ら (2001) はアメリカ社会におけるマイノリティ・グループの同化過程を分析するにあたって、その同化の結果を左右するいくつかの要因の一つとして、移民の親と子の文化変容という要素を指摘している (p.46)。これに照らした時、第 2 世代の言語獲得がどの程度進んでいるのかということは、彼らの文化変容や同化の程度、あるいは彼らが日本での生活の中でどのような資源を蓄積したのかといった点を知るうえで重要な視点になってくるとと思われる。ここにおいて言語はホスト社会への適応を検討するうえで非常に重要な資源と考えられる。

本調査を行うにあたっては、第 2 世代を主たる対象として対象者にアクセスを図ったものの、結果的に母国生れである 1.5 世代も対象者として含むことになった。実際にインタビューを行ってみると、対象者が来日後日本語を獲得するにあたって多くの困難を経験し、職業生活に入っても言語に関する困難さを訴えるケースが多く見られた。子どもの言語

獲得と年齢の関係について中島（2010）は、子どもが言語を獲得し文化を形成するにあたって、およそ9～10のあたりに1つの境目があると指摘していることから、本研究では「10歳」をひとつの目安として考えることとした。すなわち日本生まれだけでなく、10歳前に来日を果たした者を「第2世代」、10歳以降に来日した者を「1.5世代」として暫定的に区別し、分析・検討することとした。この分類はあくまでも暫定的なものであり、今後詳細な検討をする必要があると考えている。例えば、Rumbaut（2002）のように、現地生まれのみを第2世代とし、15歳未満に渡米した者をすべて1.5世代として分類している研究もあるからである。こうした世代の区切りの指標の妥当性について今後、日本におけるニューカマーの第2世代の有り様を検討するという目標に照らして、さらなる吟味が必要であると自覚している。

そこで今回の調査対象者の第一言語について整理すると、10歳以上で来日した4名のうち3名がスペイン語を第一言語であると表明し、10歳未満で来日した4名は全員が日本語を第一言語であると表明していた。そして、調査を進める中で明らかとなってきたのは、彼らの第一言語が何語であるかによって、学校経験やそこで得られた人間関係の違いが、その後の彼らの進学や就業などに大きく影響を与えている可能性である。以下、10歳以上で来日した者を「1.5世代」と10歳未満で来日した者を「第2世代」としてそれぞれについて検討することとする。

3. 1.5世代の特徴——良好ではない学校経験とルーツの隠蔽

1.5世代として区分される4名は、現在の仕事の状況が安定している者とそうではない者に分けることができた。現在の仕事の状況は彼らのこれまでの学校経験、あるいは彼らを支えた友人などの社会的資源の在り方と関連が見られた。

現在の仕事の状況に不安定さが見られるS1とS4に共通して見られるのは、ホスト社会への適応過程において文化的・経済的な障害を経験し、そうした障害に直面した際に助けとなる家族やコミュニティからの支援を多く得られていないということである。これはPortesらの示す不調和的文化変容が予測するパターンのひとつ、すなわち、資源が少なく社会的孤立から下降移動を示すパターンにあると見ることができる。

S1は、現在自営業を営んでいるが、日本語の使用にいくらかの不自由があり、仕事の先行きについても不安を抱えている。彼の中学校での学校経験はあまり良好なものではなく、現在まで関係が継続するような友人もつくることができなかった。彼の両親も経済的な忙しさからこうした状況を積極的に支えられる状態にはなかった。また進学した高校も自らの選択というよりも親の経済的な制約により限定されてしまっていた。実際にS1は周囲から多くの支援を受けているという状況にあるとは言えず、配偶者以外に相談できる人はあまりいないと表明するなど、孤立した状態にあることがうかがえる。

S4は、来日当初は手厚い支援のある中学校に編入できたものの、複雑な家族関係の影響もあって、中学校3年次の時に保護者の都合によって強制的な転校を余儀なくされ、転校先では十分な支援を受けられないまま学習意欲を喪失し、高校には進学せず就職を選じた。就職を選じたのは経済的な事情よりも「父親との生活が嫌で一人暮らしをするために」という理由を表明している。彼は家庭や学校以外のコミュニティからの支援も少ない状況にあって、ペルー人の他、ブラジル人コミュニティ等との接触を図りながら仕事を探した。現在は仕事を継続しながらも、いずれは現在の仕事を辞めて資格取得のために専門学校に通うことを検討しており、来日当初につながりのあった支援団体の日本人に相談している状況にある。現在の仕事から離脱することで、経済的には下降移動する可能性を

孕んでいる。

10代以降に来日をしたすべての者がこうした傾向を示しているわけではない。義務教育期間における学校経験が良好でなくてもその後の学校生活においてそれらが補われたと考えられるケースがS6である。彼は小・中学校では不登校に陥るほどの学校不適応に陥ったが、高校に進学した後に、それ以後の学校経験において今日まで継続する人間関係を構築でき、それらが彼の適応における障害に直面した際に助けとなる支援の源泉となっていた。S6は高校進学を機会にそれまでの中学校自体における人間関係を一旦は断ち切り、新たなスタートが切れたことを表明している。

質問者「やっぱり、高校では、それは変わるんですか。」

S6「そうですね。高校では同じ境遇の人たちと出会ったので、みんな似たような悩みを持って、似たような経験をしているので、話しやすかったり。あと、新しいところでもあるので、それまでいた人たちはいないというのも。」

質問者「最初からやり直すみたいなの。」

S6「やり直す。」

質問者「やり直せる。」

S6「そうですね。」

特に10代以降になっての来日の場合、義務教育に在籍する期間が限られているだけに、言語習得のみならず、友人やその他の周囲の人々との関係といった社会的資源をいかに調達できるかに、彼らのその後の適応が大きく影響を受けると考えられる。S6が示す事例は、義務教育終了後に社会的資源の調達に成功し、その後の適応が円滑に行われた例である。

第2世代である彼らがホスト社会において周囲との人間関係を構築しようとする中で、彼らが自らのルーツをいかに表明するかについては戦略的な意図が見受けられた。1.5世代の場合、自らの南米出身者としての表出を

積極的に行わず、むしろ隠蔽しようとする戦略を取る者の方が多い傾向にあった。すなわち日本語という資源の少なさとそこから起因する障害を、人前で目立たないという戦略をとることで、回避しようとしていたと捉えることができる。S1とS2は既に帰化を果たしているが、S1は「社会人になってから知り合った人には自分は外国から来たということをあえて教える必要はない」と考えており、S2は職場では自らの出自は決して明かさないという。S6は学校時代を振り返り、「(外国人であることを)隠したくても隠せなかったが、控えめだった。目立たないようにしていた。…(中略)…目立ったところで、「何ができるか」って言われると何もできなかったの。言葉もちゃんと話せなかったですし、みんなとうまくコミュニケーションを取れなかったのも一つの理由だと思うんですけど。…(中略)…動かない方が自分にとってはよかった」と戦略的に目立たないように過ごしていたことを示している。

今回の調査対象者の中で、10歳以降の来日(すなわち1.5世代)でありながら、第一言語は日本語であると表明したS2は非常に稀なケースである。彼は日本語を第一言語と表明するほど日本語の使用に自信を示し、「自分は外見上まったく日本人と同じ。今はどこに行っても日本人に見られる。(アルゼンチンにルーツがあることを)自分から言わなければ、びっくりされる」と語っている。

S2は、S1の弟であり、入学した中学校では共に同学年同クラスに編入された。学校への適応に苦勞する兄の様子を目の当たりにしたためか、S2は同級生と良好な関係を築き、今日においてもつながりを維持している。こうしたS2の背後には彼の日本社会に適応しようとする切迫した意識があったのではないと思われる。その意識はS2が彼の親と衝突した際に親から来日の経緯を説明され、「その現実を受け止めるしかなかった」と語ったことに表れている。さらに、「学校でもう少しくまくやることができるためにはどの

ような支援が必要だったと思いますか」という問いに対し、「母語があるとそちらに頼ってしまうから、通訳などはいない方がよかった。逆に日本語を覚えられる」と回答していることも、彼が良好であったと評価する学校経験が、彼自身にとっては厳しい現実として対峙するものであったことを示唆している。安易に断定はできないものの、S2が10歳以降の来日にも拘らず日本語を第一言語とするほどの文化変容を可能とした一因には、もはや母国には帰国できないというS2の家族を巡る現実と、その現実に耐えるしかないというS2自身の意識の在り方にあると考えることができるのである。

4. 第2世代の特徴——良好な学校経験とルーツの表出

10歳未満で来日した4名は全員が第一言語を日本語であると表明している。日常生活においては主として日本語が用いられており、日本語を使用するにあたって不安は感じていない。また、彼らはスペイン語も保持しており、親や母国親族とのコミュニケーションにはスペイン語を用いている。スペイン語の習得には母語保持のための教室に通ったりするなどして学習したり（S5）、学校卒業後の長期帰国時に文法を勉強するなど（S7）、何らかの意図的な取り組みを行っていた。意図的な母語保持をしなければならぬほど日本語への同化がすすんでいると考えることができる。

彼らの学校経験は良好であった者とそうでなかった者に分かれるが、学校段階が異なると、経験に対する評価も変化するためやや複雑なものとなる。

小学校での経験が良好であったと表明した者は2名（S7、S8）、良好ではなかったと表明した者は2名（S3、S5）と評価が分かれた。ただしS5は友人は多かったと答えており、すべての面において良好でなかったということではないようである。

中学校については、良好だったとするのはS8のみであり、S3、S5、S7は学校や教員に対する不信を表明している。ただし、友人関係も含めすべてが良くなかったと評価しているのはS3のみであり、S5とS7は中学校時代の友人については良好な関係を構築していた。S5とS7は友人との関係や部活動自体は「楽しかった」と表明し、今日でもつながりのある人間関係を築いていた。こうした人間関係は、彼らが現在何らかの問題に直面した際に支援を得る基盤となっている。彼らは学校生活を通して築き上げた人間関係を日本社会に適応する資源として用いており、それらをどの程度動員できるかによって適応の度合いが異なると考えられる。

小学校と中学校の経験がともに良好ではなかったとするS3は、「小中学校時代には学校内では友人はいなかった」表明している。S3は高校時代に友人を作ることができ、今日までその関係が継続しており、この点では1.5世代のS6のケースと類似している。ただS3は学校との衝突から高校を中退し、現在の仕事を得るまで4回の転職を経験している。今日正社員としての待遇を得ているが、肉体労働を中心とする建築関係の仕事に就いており、安定性と継続性という点では不安要素を抱えている。

第2世代の場合、以上のような学校経験の良し悪しに関わらず、自らのルーツを明確に表出している点が特徴的である。小学校入学後、当初は外見や言葉について周囲から揶揄された経験が多少あったとしても、先行する兄の存在や揶揄への対抗により、彼らの外国人性は次第に意識されないものとなっていった。むしろ他の外国人がいない学校に転校して初めて、自らの外国人性を意識したという経験がされていた（S5）。こうした自らの外国人性に対する周囲の反応を補ったのが、獲得された日本語と考えられる。外見上の相違があっても同じ言語を使用することで周囲との関係を良好に保つことができたと考えられる。

さらには、彼らが保持するスペイン語の能力を現在の仕事に生かし、自らの社会的地位を上昇させる資源として活用しようと考えていることも特徴的であった。S5、S8はともに海外に事業拠点を有する企業に就職しているが、彼らはスペイン語を自らの言語資源として利用し、海外で仕事をしたいという上昇志向を有している。

5. 1.5 世代と第2世代に共通してみられる傾向——独立した家族

彼らの来日年齢や第一言語に関わらず共通して見られたのは、ほとんどのケースにおいて親世代との関係が良好なものであり、また、子世代が経済的に自立できた後は、独立した家族として扱われているという点である。

配偶者やパートナーの選択に当たっては、ほとんどのケースにおいて日本人が選択されていた。配偶者の選択は個人の選択に委ねられており、親や親族から紹介または強制されるということは見受けられなかった。程度の差はあるものの、南米出身としてのルーツについてそれぞれが一定の意識を持っているにもかかわらず、同国人ではなく日本人の配偶者を選択することの背後には何が隠れているのだろうか。これはあくまでも仮説的な域を出ないが、おそらくは経済移民としての特性が関わっているものと思われる。ホスト社会における経済的成功や地位達成を目指して移住してきた彼らにとって、日本社会においていかに経済的または地位的に達成するかということが移住の成功の指標としてあり、そのためにも配偶者の日本人性にメリットを見出しているのではないかと、ということである。すなわち日本人の配偶者を得ることにより、日本社会において遭遇する様々な障害への対応をよりスムーズに処理することを可能とすることも考えられる。

またそれぞれが抱えている家族の問題について一定の距離を置いているということも一つの特徴として指摘できる。S1 および S2 に

は弟、妹がいるが、それぞれの家族については年に数回程度顔を合わせる程度であり、関係は悪くはないものの一定の距離を置いていた。S7 は離婚した妻との関係について悩みを抱えながらも、自分の両親にはあまり詳しく相談していないという。それぞれのきょうだいの家庭とは決して嫌悪な関係にあるわけではないと言いながら、密接に関連した状況にあるとは言えず、ある程度独立した家族関係にあるという特徴を見出すことができるのである。

6. 出身国における親の社会的地位との関係——大学進学に着目して——

補足的にもう一点指摘しておきたいのは、母国における親の社会的地位と第2世代の学歴との関連である。1.5 世代では1名 (S6) が、第2世代では2名 (S5、S8) がいずれも四年制大学に進学していた。兄弟である S6 と S8 の父親は来日前には経理士としての資格を持ち経済的にも恵まれた状況にあったという。母親も中央省庁に勤務し階層的には中産階級以上にあったと考えられる。S5 の父親は来日前は軍人であり、やはり中産階級以上の地位にあったと考えられる。S5、S6、S8 はそれぞれ直接親から勉強を教わったという経験はないとしながらも、より高い学歴を取得することについて日常的にプレッシャーを受けており、親からの強い影響が認められる。

加えて注目したいのは、大学進学を果たした3名のいずれもが、自らの大学進学を自主的に考え進学先を検討し、入学試験に合格するためのノウハウを外国人支援者から得ようとするなど (S6、S8)、資源の積極的な動員を図っている点である。その際には親も積極的な支援をしており (S5)、高い学歴を取得するための親側の意識の高さがうかがえる。

第2世代のホスト社会への同化は、親世代の人的資源の高さや社会的資源の蓄積によっ

て左右されるという見方は、ともすれば第2世代の同化の程度は親世代がどの程度の資源を蓄積しているかに左右されるという見方を導きかねない。上述の例から見出されるのは、第2世代の同化が親世代が蓄積した資源に完全に依存しているのではなく、第2世代自身も主体的に資源の調達を図り、ホスト社会において上昇移動を志向する姿勢である。

7. まとめ

以上、南米にルーツを持つニューカマー第2世代の特徴について検討してきたが、彼らが日本社会に適応していくにあたって、日本語の獲得と学校経験が大きく影響している可能性が伺われた。10歳以降に来日した1.5世代の場合には、日本語の獲得に多くの困難があり、学校でもうまく周囲に馴染むことができず孤立した傾向が見受けられた。そして学校教育が終了した後も仕事での問題を一人で抱え込みがちであり、周囲に相談できる日本人が少ない状況に置かれているようであった。一方で、10歳未満で来日をしている第2世代は日本語の獲得が比較的スムーズに行われており、さらに周囲との関係も安定したものとなっている傾向が見られた。この場合友人などからの支援を様々な場面で受けることができるように見受けられる。

こうした傾向が女性についても言えるのかどうか、また異なるエスニシティ間で比較した場合に、どのような違いが見受けられるのか、今後調査対象を拡大し検討を続ける必要がある。

【参考文献】

- 福岡安則 1993『在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ—』中公新書
梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク—』名古屋大学出版会

- 金泰泳 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ—』世界思想社
兄島明 2006『ニューカマーの子どもと学校文化』勁草書房
中島知子 2010『マルチリンガル教育への招待—言語資源としての外国人・日本人年少者—』ひつじ書房
太田晴雄 2000『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院
Portes, Alejandro, G.Rumbaut, Ruben. 2001 Legacies The Story of the Immigrant Second Generation Russell Sage Foundation
Rumbaut, R., G., 2002 'Served or Sustained Attachments? Language, Identity, and Imagined Communities in the Past-Immigrant Generation' in Peggy Levitt & Mary C. Waters, ed The Changing Face of Home The Transnational Lives of the Second Generation, pp.43-95.
志水宏吉・清水陸美 2001『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって—』明石書店
清水陸美 2006『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界—』勁草書房
丹野清人 2007『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会
Zhou, Min, and Carl L. Bankston. 1998. Growing Up American: How Vietnamese Children Adapt to Life in the United States. Russell Sage Foundation.

※本研究は平成26年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「ニューカマー第2世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成にかかわる総合的調査」（課題番号26285193 研究代表者：角替弘規）による研究成果の一部である。